甲府市立貢川小学校　学校だより　第 ２６ 号　令和３年１１月１日 発行

みつぎっ子

学校教育目標

「やさしく　かしこく　たくましく」

〒400-0048　山梨県甲府市貢川本町8-1　TEL (055) 222-2408　FAX (055) 222-2407　文責：校長　伊東

『校内研究会』がありました

子どもたちの学力を向上させるためには、日々の授業が、子どもたちにとって『わかる授業』でなければなりません。そのためには、私たち教師が力量を磨き、日々、授業改善に努めることが大切であると考えます。その一つのきっかけとなるのが、毎月実施されている『校内研究会』です。年度初めに研究テーマを設定し、わかる授業の創造をめざして、全職員で研究に取り組んでいます。研究は、低・高学年の二つのブロックに分かれて行われていますが、今回（10月25日）は、低学年ブロックの授業提供（体育科）により校内研究会が開催されました。

実際に授業を提供してくれたのは3年生の学級です。『開脚後転』に取り組むマット運動の授業でした。ICT機器（一人一台端末）の活用が、子どもたちが主体的に学び、理解を深めるために有効であるということが実証された、素晴らしい授業でした。

次回は11月の中旬に、高学年ブロックの授業提供による校内研究会が計画されています。
今後も、分かる授業の創造をめざし、校内研究会の充実に取り組んで参ります。

【準備運動】
体重を支える「手首」や「首」を中心にほぐしていきます。メニューに沿って、自分たちで進めていました。

【めあての確認】
授業改善の視点となる「甲府スタイル」を体育科の授業でも取り入れ、全員で今日の課題を確認し合いました。

【課題解決①】
端末を活用し、自分たちで試技を撮影し、改善ポイントを検証しながら、技の成功（課題解決）につなげていきます。

【課題解決②】
全員の前で、傾斜をつけたマットを使って試技をします。上手に回れると、大きな拍手が体育館に響きました。

【授業研究会】
先生方はグループに分かれ、今日の授業を成果と課題に焦点を当てて、お互いに振り返りました。

【指導・助言】
指導主事から指導・助言を受けます。素晴らしい授業であったと、お褒めの言葉をいただきました。

甲府市教育委員会による『学校訪問』がありました

先ずは、10月25日（月）の午前、甲府市教育委員会　原教育委員　様による、学校訪問（教育視察）がありました。はじめに私から、本校の概要について説明をさせていただいたあと、全学年の授業参観をしていただきました。原教育委員様からは、『全校の子どもたちが、非常に落ち着いて学校生活を送っている。』『組織的に感染症対策が行われている。』『環境整備が行き届いている。』等々、視察した感想を含めてご指導くださいました。

そして10月28日（木）の午後、今度は、甲府市教育委員会　數野　教育長　様による学校訪問がありました。3日前に行われた原　教育委員様の訪問の時と同じように、數野　教育長様にも、全校の授業参観をしていただきました。参観されたあと、數野　教育長様からは、『子どもたちが皆、落ち着いて授業を受けていた。』『日頃から先生方が、子どもたちに対して丁寧に接してくださっていることに感謝している。』といったご感想をいただきました。ありがとうございました。

『初任者研修授業研修会』がありました

本校は、今年度（令和3年度）、山梨県教育委員会より、4月から教員として教壇に立つことになった初任者（新採用教員）に対し、年間5回の模範授業を提供する実習校の指定を受けており、これまでに3回の授業提供を行ってきました。そして先日の10月29日（金）には、4回目となる「道徳」の授業提供が、2年生の協力で実施されました。当日は、「きまりを守ること」を主題にした授業で、みんなの必要なものを大切にし、他人に迷惑をかけずに生活することが、よりよい生活につながるということに気付くと共に、約束やきまりを守ろうとする態度を育てるといった内容でした。登場人物の気持ちをワークシートに書き込んだり、役割演技によって、登場人物の揺れ動く心の変化を考えたりしながら、活発に意見交換が行われる、素晴らしい授業でした。

『脱穀』を行いました

【①脱穀機で･･･】

【②千歯こきで･･･】

【③籾（もみ）】

【④唐箕（とうみ）で･･･】

10月27日（水）、5年生が社会福祉協議会の協力を得て、脱穀作業を実施しました。慣れない手つきでしたが、10kg以上の籾を脱穀することができました。

さて、稲の穂先から籾（もみ）を落とす「脱穀（だっこく）」は、江戸時代に発明された「千歯扱き（せんばこき）」によって大いにはかどるようになったと言われています。そして、足踏脱穀機、動力脱穀機へと進歩していったとのこと。

脱穀は、稲扱き（いねこき）とも言いますが、「丁寧」と「能率」という矛盾する二つの要求を満たすために、さまざまな工夫がされてきたそうです。

近世前期には竹製の扱き箸（こきはし）が使われていました。竹を箸のようにした道具で、一日に扱く籾の量は男性が12束、女性が9束くらいだったそうです。

千歯扱きは元禄年間に発明された画期的な農具で、最初は麦を脱穀するための竹製の歯でしたが、やがて鉄の扱き歯に改良され、稲の脱穀用として普及したそうです。鉄の歯の隙間に稲の穂先を入れて、引き抜くと籾だけが落ちます。籾が付いたままの小さな穂先が多く出るので、さらに唐棹（からさお）で何度も叩いて籾を分離します。「粒々辛苦（りゅうりゅうしんく）」と言って、一粒一粒を苦労して育てたのですから、一粒たりとも無駄にはできませんね。

今後、精米をして学校に届けてくださることになっています。とても楽しみです。
今回もまた、大変お世話になりました。ありがとうございました。